

日露戦争と『帝国文学』*

徐 載 坤**

日露戦争初期における東大アカデミズムと『帝国文学』の動きを、『帝国文学』1904年4月号の3篇の戦争詩と、同時期に刊行された教科書を中心に考察した。

まず、坪井九馬三の詩「征露進軍歌」は、『新体詩抄』に収録されている外山正一の「抜刀隊」の「我が官軍」というテーマを継承していた。

次に、坪井、上田万年、芳賀矢一等の東大アカデミズムの中核グループは、〈中等〉と〈軍人〉用の教科書作りに深く携わっていたが、「振天府」をはじめ、日清戦争関連のテキストが中等と軍人用の教科書に繰り返し採用され、日清戦争勝利のシンボル化していた。

そして、各教科書には、様々な儀式に必要な祝辞と弔辞のテキストが載せられていた。そして、芳賀の詩「祝捷行軍歌」は、「捷報」ムードを盛り上げるにとどまらず、脱亜論までを強く打ち出していた。

キーワード：日露戦争、帝国文学、坪井九馬三、上田万年、芳賀矢一
(러일전쟁, 제국문학, 쓰보이 구메조, 우에다 가즈토시, 하가 아이치)

1. はじめに

日本は日清戦争(1894-95)を通じて、はじめて近代的な国際戦を経験したが日露戦争は人的・物的な規模においてはそれとは比較にならなかった。いわゆる〈国家総力戦〉という近代戦争を経験することになる。日露戦争が日本社会全体に及ぼした影響は計り知れない。その中で、出版メディアと新体詩に及ぼした影響については、すでに総合雑誌『太陽』を中心に考察した。総合雑誌『太陽』が、読者の拡大と売上増

* 本研究は「2022年度 韓国外国語大学校内学術研究支援金」によるものである。

** 韓国外国語大学通訳大学日本語通訳学科教授、jaegon82@hanmail.net

加のため、日露戦争関連の言説に紙面を割愛し、文学愛好者、特に新体詩に関心を持つ若者層の増加に注目し、新体詩の活用に乗り出したことが分かった¹⁾。

本稿では、当時のアカデミックを代表する『帝国文学』が日露戦争をどう扱っていたかについて考察しようと思う。『帝国文学』は、東京帝国大学文科大学の教授、O.B.、学生らによって、1894年12月に設立された〈帝国文学会〉の季刊誌として、1895年1月に創刊された。創刊から1905年までの第1期で注目すべきことは、「日清戦争の捷報にともなう国家意識の高揚を背景とする国民文学創造の提唱」と「新体詩の用語、詩形変革に関する論議が多出していること」²⁾が挙げられる。さらに、近代国家建設に必要な人材育成と学問研究のために設立された高等教育機関を母体にもつ文学団体の〈帝国文学会〉、そして、その機関紙である『帝国文学』が国家の運命を左右する日露戦争に無関心でいられるはずがなかったに違いない。そこで、日露戦争期の『帝国文学』に掲載された戦争関連言説を分析することで、戦争とアカデミズム、そして新体詩との相関関係について考察したい。

2. 「我は官軍」というナショナリズムの系譜

日露開戦が始まった後、雑誌『太陽』ではいち早く、3月号に河井醉茗の「露国公使を送る」「敵艦来」の2篇の戦争詩が掲載されていた。

一方で、『帝国文学』には、第10巻第4号(4月10日)の「詞藻」欄に、戦争関連の言説が登場する。坪井九馬三「征露進軍歌」、上田万年「我兵見よやロシヤ国」、芳賀矢一「祝捷行軍歌」、土井晚翠「征夷歌三章」の4篇の戦争詩と、〈臨時増刊予告〉が載っている。予告文には、「本月下旬」に発行される「臨時増刊第1号」に、三宅博士の『戦争と文学』、独逸学者大村仁太郎の「独逸現代の文学」、佐々木信綱の「南清風景談」と、

1) 徐載坤(2022)「日露戦争期の新体詩研究」『日本語文学』第98輯、日本語文学会、pp. 347-364.

2) 日本近代文学館編(1977)『日本近代文学大辞典 第5巻 新聞・雑誌』講談社、p.276.

第1回募集当選懸賞小説3篇及び審査委員編集委員の評言が収録されると書かれている。4月号、そして臨時増刊号の筆者の名前をみただけで、当時のアカデミックをリードしていたそうそうたるメンバーであることが分かる。

坪井は東大文学部と理学部を卒業した後、1886年に東大講師になり、その後、ヨーロッパに留学、1891年に帝国大学文科大学教授となる。1904年に文科大学の学長になるが、前任が井上哲次郎、そして後任が上田万年である。

では、坪井の詩から見ていこう。

「征露進軍歌」

高麗の山/支那の海/旭のみ旗光るなり/進めや進め/大和ますらを。
 //旅順のみなと/うらちぼのさき/我雷鳴りはためく//大和ますらを。
 //白山の雪/黒水の水/我馬の蹄にとくる/進めや進め/大和ますらを。
 //ちたの谷/ばいかるの浜/すめらみいづにゆるぐなり/進めや進め/大和ますらを。(p.38)

まず、高麗、支那、「ちた」(ロシア)という国名と、旅順、「おらちぼ」(ウラジオストク)「白山」「黒水」「ばいかる」という地名を羅列した後、そこを「大和ますらを」が「雷」を鳴りはためかせながら進撃してゆく様子を描いている。各連の終わりに「進めや進め/大和ますらを」が繰り返されている—第2連には「進めや進め」が抜けており、1行空けになっているが、これは校正ミスだと思われる—が、この「進めや進め」というリフレンは、新体詩の創始者の一人であり、東大アカデミズムの先輩でもある外山正一の「抜刀隊」(『新体詩抄』所収)の「敵の亡ぶる夫迄は/進めや進め諸共に/玉ちる剣抜き連れて/死ぬる覚悟で進むべし」という有名なりフレインを連想させる。それだけでなく坪井の詩の「雷鳴りはためく」という部分は、外山の「四方に打出す砲声は/天に轟く雷か」に類似している。というより、〈愛国忠誠〉という外山のモチーフを忠実に継承していると言えるのではなからうか。

坪井は、1903年と1904年、師範学校と中学の東洋史と西洋史の教

科書作りに携わっていた³⁾。1903年3月に刊行された『師範学校東洋歴史教科書』(文学社)の第42章のタイトルは、「ロシアの東略清・ロシアの関係イギリス・ロシアの衝突」で、ロシアのアジアへの領土拡大の歴史が詳細に書かれている。

第一節 ロシアの東方侵略はネルチンスキ条約によりて漸く頓挫す、清の世宗の世に及び、外蒙古・天山北路平ぎてシベリアとの交通頻繁となる。一七二八年清世宗雍正六年ロシア、キャフタ条約を結び、キャフタを以て二国の互市場となし、又ペキンに至りて通商し、公使館・教会堂を建設する許可を得たり。太平洋沿岸に於ては一六九六年カムチャッカを征服し、次でアラスカ・カラフトを占領して漸く南下し、フポストフはエトロブ島を侵掠して我戍兵と戦ひ、一八〇四年レザノフ本邦に使用して通商を請ふ。(中略)一八五八年アムル河北の地を割き、アムル・スガリ・ウスリ三江の自由航海権を与ふ、之をアイグン条約と云ふ。又清とイギリス・フランスとを和せしめたる報酬として、ウスリ河東の地を割かしめ、一八六〇年ウラヂポストクを置く。是より先き本邦はロシアと久しくカラフト境界を議す、遂に一八七五年明治八年に至り、本邦は千島を取り、ロシアはカラフト全島を領し、クシウコタンをコルサコフと改む。是に於て東西シベリア・アムル河地方の三大部を并し、北方アジアの地悉くロシアに入る。

(pp.188-190)

そして、坪井が校閲を担当し、1904年10月に刊行された『露国之真相』(文学士堀竹雄・文学士武村尚次編纂、躬行会蔵版・博文館発行)の「編纂ノ趣旨」では、「今回の戦役」が「正義公道」であることと「国民之忠勇義烈」が強調されている。だから、当時、東洋史の専門家として最高権威を持っていた坪井が書いた詩「征露進軍歌」が、外山正一の「抜刀隊」の「我は官軍」というテーマを基底にして、この戦争を正当化

3) 国会図書館デジタルライブラリーには次のようなものがある。『師範学校東洋歴史教科書』(文学社、1903)『師範学校西洋歴史教科書上・下』(文学社、1903)『中学東洋歴史教科書』(文学社、1903)『中学西洋史要』(文学社、1903)『師範学校西洋史要』(文学社、1904)『西洋歴史』(文学社、1905)。

するために書かれたのは付言しなくてもいいだろう。

次に、上田万年の詩の分析に入りたい。

「我兵見よやロシヤ国」

(一)/陸路進むる十万の/我兵見よやロシヤ国/こゝにも神州男
児あり/将たる人に智略あり/兵たる者に武勇あり/すぶるに仁義
の規律あり//(二)/陸路進むる十万の/我兵見よやロシヤ国/こゝに
も神州男児あり/武器悉く鋭利にて/衛生輜重通信の/機関もすべ
てとゞのへり//(三)/陸路進むる十万の/我兵見よやロシヤ国/こゝ
にも神州男児あり/一つ言葉に一つ血の/万世不易の皇室を/い
たゞく民に一致あり//(四)/陸路進むる十万の/我兵見よやロシヤ
国/こゝにも神州男児あり/十年のうらみ遼東に/かばねと残すは
らからが/かたみの剣さやばしる//(五)/陸路進むる十万の/我兵見
よやロシヤ国/こゝにも神州男児あり/二千年来きたへたる/やま
とだましひ今茲に/さくらと共に咲きにほふ//(六)/陸路進むる十
万の/我兵見よやロシヤ国/こゝにも神州男児あり/とよさかのぼ
る天つ日の/朝日の御旗野に山に/てらせば消ゆる草の露

(pp.39-40)

「神州男児」の「十万」大軍は、将校は「智略」を、「兵」は「武勇」と「仁義の規律」を合わせ持っている。さらに、個人の武器は「鋭利」であり、全軍の「衛生輜重通信」も整っている。去る「十年のうらみ」を晴らすため、「二千年来きたへたる/やまとだましひ」を咲かすため、「朝日の御旗」をはためかせながら、「草の露」(=ロシア)を消そうとしている。坪井の詩では「進めや進め/大和ますらを」が繰り返されていたが、この詩では「陸路進むる十万の/我兵見よやロシヤ国/こゝにも神州男児あり」が繰り返されている。

先に、坪井が師範学校の東洋史の教科書を執筆していたことを紹介したが、上田万年も学校教育、特に作文教育に深く携わっていた。彼は、『作文教授法』(富山房書店、1895年)を出し、作文の重要性とその方法についての持論を展開していたが⁴⁾、本の目次は次の通りである。

4) 同じく、1895年に出した『国語論』(金港堂)の中の「尋常小学の作文教授につきて」とい

- 第一章 作文教授の必要
- 第二章 作文教授の目的
- 第三章 作文教授の目的を達する手段
- 第四章 作文教授の材料の区域
- 第五章 作文教授の階級
- 第六章 文章の取り扱い方

まず、「第1章 作文教授の必要」の冒頭には作文の重要性について、次のように書かれている。

文章はわれわれが己れの思想を書き表はして、常に日用の便利を足すのみでなく、之を千里の遠きに達し、之を万代の後に遺しますもの故、われわれ人間に取りては最も大切なもので、まことかやうな事は、今更申すまでもないのであります。現に野蛮とか未開とか開化とかの別を立てます折にも、此文字の有無や、此文字を使用して作る文章の程度などが、何時も重きを置かるゝので、これは丁度われわれが思想をたやすく言語で示せると云ふことが、われわれと他の動物の区別を立つる上に、重要な標準となるのと同日の話であります。

それ故、此大切な文章を作ることを教ゆると云ふことは、われわれ人間に取りては甚だ必要でもありますし、又甚だ貴ふべき仕事でもあります。(pp.1-2)

「己れの思想」を「文章」で書き表したり、「言語」で示したりする行為こそ、我々と動物を区別する「重要な標準」であるから、それを教えることは、「甚だ必要」で「甚だ貴ふべき仕事」であると主張している。

さらに、「作文教授」と「読方教授」の差についても、六つに分けて説明している。

1. 読方は言葉から思想へ進むが、作文は、逆で、思想から言葉へ進む。

う文章の中で、小学校における作文指導の方法について、学生の実例を挙げながら、添削のやり方をはじめ、詳しく説明している。

2. 読方は理解を、作文は利用を、主とする。
3. 読方は他人の説を網羅することに、作文は自分の説を記述し、他人の説を敷衍することに、注意する。
4. 読方の順序は分析的で、作文の順序は総合的である。
5. 読方は具体的なものから抽象的なものへ、作文は抽象的なものから具体的なものへ進む。
6. 読方は受動的で、作文は能動的である。(pp.11-12)

そして、「作文教授の要」は「思想を達者に書き表はす」と「思想を健全に書き表はす」ことにあるので、両方を兼備できるように「教へこむ」のが「作文教授の大趣意」と締めくくっている。

次に、第5章「作文教授の階級」では、実際の指導要領について説明している。教育学上の格言の「やさしいものからしてむづかしいものに進んで往け」に従い、最初は(「文章の考と言葉を」)「簡単に書き直す」、二番目が「模様換へして写す」、三番目が「自ら文章を作り出す」という三つの段階に分けて、指導すべきであると説明している。

最初の「簡単に書き直す」トレーニングの練習方法は「(文章を)写す」「暗誦したものを書く」「朗読筆記」「話されたこと及び読んだことを書き直す」「日用文をかく」に分類される。「日用文」とは、「勘定の受取」「届書」「時候の見舞の文」「病氣見舞の手紙」などで、これらの文章は「体裁が極まって居るので、その「極まり文句」を生徒に覚えさせるのがその目的であるという。

二番目の「模様換へして写す」トレーニングの方法は、「文章の意味は其俣にして置いて、文句を取換へて書く」と、「文句は全じ様にして、中の意味を取換ゆる」ことの二つがある。最初のトレーニングは、「生徒に色々同じ意味のことを繰り返させる時、「それぞれ違った種類の言葉を用ゐさす」ようにして、「それぞれの場に適當した言ひ表はし方を覚えさすこと」が目的である。二番目は「歌を手本として話す事」ことで、「歌の一定の形」を取って「文章に直す」ことである。三番目は、「約文」(「文章を約むる」)を書かせることである。四番目は「文章を敷延する」ことで、「これは前に言つた約文とは丁度さかさまであつて、文章を長くする」トレーニングである。旅行などの

メモを参考にして、紀行文、または「報告」を書かせることである。五番目が「文体を同じくして、中の意味を取換へて書く」トレーニングである。

3. 「聖徳伝説」の誕生と「振天府」

このような上田万年の作文指導法に基づいた教科書を編纂したのが、芳賀矢一であろう。友田宜剛とペアを組んで、〈友田編述・芳賀校閲〉という形で作文教科書を刊行していることを国会図書館デジタルライブラリー等から確認できる。

- ・『中等教育作文教範 卷二』(光融館、1900〈近代教科書デジタルアーカイブ⁵⁾所収)
- ・『軍人教育作文教程 卷二・卷三』(光融館、1902)
- ・『中学校用作文教科書 卷一・卷二・卷五』(光融館、1903)
- ・『中等作文教本 後編 卷二』(晩盛処、1908)
- ・『新編中等作文教本 卷五』(晩盛処、1913)

まず、『中等教育作文教範 卷二』から検討していくことにする。

この本で注目すべき項目は、「第十八 戦利品拝観の記」である。この章の冒頭には次のような付記が付いている。

○次ナル模範文ヲ、一段ツツ熟読シテハ卷ヲ掩ヒテ、自作シ、再、模範文ニ対照セヨ。

明治三十一年十月十八日のことなりき。宮城内に、過ぎし二十七八年役の戦利品を蔵め給へる御府庫のあるに、参りて拝観すべき旨、御許を蒙りぬ。当日午後二時詔されし人人省中会議所に集まりて、暫し待ちける程に、田中宮内大臣出て来られ、左の趣

5) 〈近代教科書デジタルアーカイブ〉 <https://nierlib.nier.go.jp/lib/database/KINDAI/EG20070442/900335863.pdf>(閲覧日: 2023.01.18)

旨の演説をせらたり。』許サレテ到り次第。/(中略)始より終まで大御心を注がせられ、深き御意匠を以て、それぞれの結構装飾等をも定めさせ給ひしなり。(中略)中にも添きは、戦病死者の真影、士卒の姓名に至るまで、扁額に志つらひ、巻物に装ひて、疎かならず保存し給ひ、志ば志ば親臨し給ひて、その時の状を思ひやり給ひその人の心をしのび給ふ事、御側より見奉る臣等いかでか感涙にむせばざるべき。(中略)/御府庫は、吹上御門を入りて、字三角矢来と申す所に建て設け給へり。振天府と名づけ給ふと承け給はる。(中略)/そもそも人、生れて男子たらば軍人になれかし。同じく死ぬるものならば外国の兵と戦ひて死ねべし。たとひ、身は戦場の露と消ゆとも、朽せぬ名をば雲井にあげんこそ、臣民たる者の本分なるべけれど、感激の涙を硯にそそぎ、謹み畏みて記しぬ。』男子ノ本領ヲ述ベテ文ノ結尾トス。/応用自作文題/商品陳列館縦覧の記。連合共進会縦覧の記。軍艦観覧の記。

(pp.102-111)

戦前、皇居にあった「日本が近代以降に行った戦争の記念品・戦利品を収蔵した倉庫であり、戦没兵士の写真・名簿などを納め慰霊・顕彰する施設」が「御府(ぎょふ)」で、「振天府」(しんてんふ；日清戦争、1896年10月)、「懷遠府」(かいえんふ；北清事変、1901年10月)、「建安府」(けんあんふ；日露戦争、1910年4月)、「惇明府」(じゅんめいふ；第1次世界大戦・シベリア出兵、1918年5月)、「顕忠府」(けんちゅうふ；済南・満州・上海事変、日中・太平洋戦争、1936年12月)が造られたのである⁶⁾。その設置目的は「天皇の足下に戦利品が置かれることで、戦勝と軍の栄光はより権威づけられた。/そして戦没将兵の遺影と名簿を置くことで明治天皇が発案したとされ、天皇によって戦没者が深く悼まれているという物語が国民」に伝えること⁷⁾、いわゆる「聖徳伝説」⁸⁾のためであったが、しかし明治天皇が振天府を公式に訪ねたのは、1896年11月5日の1度だけであるという⁹⁾。にもかかわらず、

6) 井上亮(2017)『天皇の戦争宝庫』筑摩書房、pp.9-10.

7) 井上亮(2017) 前掲書、p.11.

8) 井上亮(2017) 前掲書、p.27.

9) 井上亮(2017) 前掲書、p.44.

「国家が軍備拡張へ向けたキャンペーンの一端」¹⁰⁾として振天府の公開が進められ、その対象も、「皇族や大臣、高級軍人などの貴官顯官、いわゆる有資格者」¹¹⁾から、日本の侵略戦争の拡大と共に「御府」が増えるにつれ、教育関係者、最後は戦没者遺族までに広がり、1932年4月18日、遺族の最初の拝観が行われる¹²⁾。井上によると、振天府拝観の記事が最初に出たのは、1899年3月31日の『都新聞』であるという¹³⁾。そして最も早い「拝観記」として『明治文章読本』(日本文学会編纂、1909年)に収録されている国文学者の関根正直の1898年10月18日の文書を紹介している¹⁴⁾。しかし、前で紹介した通り、この文章は『中等教育作文教範 卷二』に収録されている。ただし、文章の著者は明記されていなく、文章の途中に、「許サレテ到り次第」「男子ノ本領ヲ述ベテ文ノ結尾トス」のように、元の文章にはない短い説明文が挿入されている。

本来は、「戦利品・記念品の収蔵施設として構想された御府は、それを展示・公開することにより国威発揚、軍備増強のための宣伝装置の要素」が加わり、「さらに天皇による慰霊・顕彰の説話により、「戦没者を悼む皇室」のイメージ戦略」にも使われ、「そして第三の「機能」として教育施設の要素が付加され」て「教育を主目的とした拝観が増えていく」のである¹⁵⁾。

ここで、話を〈振天府〉に戻すと、1902年に刊行された『軍人教育作文教程 卷二』の「第三課 詩歌格言ノ敷衍」の〈応用文題〉にも登場するが、目次は次の通りである。

10) 井上亮(2017) 前掲書、p.45.

11) 井上亮(2017) 前掲書、p.44.

12) 井上亮(2017) 前掲書、p.167.

13) 井上亮(2017) 前掲書、p.18.

14) 井上亮(2017) 前掲書、p.46.

『明治文章読本』では、関根の文章の後に、『新体詩抄』の編者の一人である外山正一「我が海軍」という新体詩が載っている。また、後で取り上げる『軍人教育作文教程 卷三』の第八課の「文例」の一つである大和田建樹の「英照皇太后陛下の御大葬を拝す」も、『明治文章読本』の第四二課に収録されている。

15) 井上亮(2017) 前掲書、pp.59-60.

第一課	首尾呼応ノ整頓語路ノ調和
第二課	短文ヲ長クスルコト
第三課	詩歌格言ノ敷衍
第四課	長文ヲ短クスルコト
第五課	引用法
第六課	伝記文
第七課	戦記文
第八課	対語法
第九課	時間ト確定未定トノ言ヒ表ハシ方
第十課	直現法
第十一課	翻訳文
第十二課	離別ノ情ヲ表ハス文

この巻は目次から分かるように、兵士にいろんな文章を書かせるトレーニングがその目的で、各課の冒頭で、その課の学習目標について次のように提示している。

第三課 詩歌格言ノ敷衍

詩歌格言ノ意ヲ敷衍センニハ、先其ノ中ニ含蓄セル意義ヲ仔細ニ点検シ、之ニ関聯スル諸種ノ事項ヲ想起シ、サテ之ヲ、前課ノ短文ヲ長文ニスル方法ニ順ジテ書き延バスベシ。

左ニ少シク例ヲ示サシ、 (pp.16-17)

詩歌と格言に「含蓄」されている「意義」と「事項」を「想起」して、前課で学習した「短文ヲ長文ニスル方法」を活かして「書き延バス」練習をすることになっている。さらに、新体詩、漢詩、格言、俳句らの「例」を提示した後、その解説文を載せている。

そして、〈応用文題〉の例の一つとして「振天府」が次のように提示されている。

振天府 一、弾丸・銃砲・ほこ・つるぎ日清戦利の品々を列ね
給ひし振天府かしこしや大内山のうへに立てり。
二、将校・士官・下士・歩卒 戦病死者のおもかけを

掲げ給ひし振天府かしこしや天皇陛下の大御し
わざ。 (pp.23-24)

井上によると、これは1902年に刊行された高等小学校向けの唱歌教科書に収録されている同名の唱歌歌詞であるという¹⁶⁾。しかし、それ以上の情報は書かれていないが、この教科書とは、先の『軍人教育作文教程 卷二』より、八ヶ月早い、1902年4月に出版された『唱歌教科書』(共益商社編)の〈第三卷〉であることを〈近代教科書デジタルアーカイブ〉から確認できた¹⁷⁾。同じ時期に刊行された唱歌教科書に載っている唱歌歌詞が、兵士の作文トレーニングのテキストとして採用されたことは単なる偶然ではないと思われる。1886年、伊沢修二と共に『新体詩抄』の編者である外山正一と矢田部良吉が、文部大臣森有礼に「音楽学校設立ノ儀ニ付建議」を出していたことから判断すると、東大(教育)アカデミズムの中核グループが、唱歌と新体詩と作文教育の連動を計らっていたと思われる。

話を『軍人教育作文教程 卷二』に戻すと、作文教育の対象が兵士であるだけに、軍隊により実用的な作文トレーニングが求められたわけで、一般人(の教育)には無縁であるが、軍人には必須な「戦記文」の教育を行わざるえなかったのであろう。

第7課「戦記文」では、「戦記文ハ記事文ノ一種ナリ。繁ニ失セズシテ、実況見ルガ如クナランコトヲ要ス。」とし、第1問は「豊嶋の戦」という題で、「依田百川ノ文」を、各章ごとに提示した後、次のように書き換えることを課題に出している。

1. 左ノ文ニツキテ語句ノ断ルベキ所ヲ断リテ巧ミナル文トセヨ。
2. 左ノ語句ヲ、程ヨク連結シテ文トセヨ。
3. 左ノ口語ヲ文章ニ改メヨ。
4. 左ノ文中俗語ノ混入セルモノヲ文語ニ改メヨ。
5. 左ノ文ニ句読点ヲ施セ。

16) 井上亮(2017) 前掲書、p.14.

17) 〈近代教科書デジタルアーカイブ〉 <https://nierlib.nier.go.jp/lib/database/KINDAI/EG00008036/900139490.pdf>(閲覧日：2023.01.18)

6. 左ノ文ニツキテ、不用ナル語ヲ削レ、削ルガタメニ、前後改ムベキ所アラバ之ヲ改メヨ。 (pp.67-71)

そして練習問題の第2問は、「馬圈子占領」で、「左ノ事項ヲ綴り合セ、適当ニ文辞ヲ修飾シテ完全ナル一篇ノ文トセヨ。」としている。しかし、この問題は、前で取り上げた『中等教育作文教範 卷二』の「第二十三 百計尽きて進撃喇叭を奏す」の課題と全く同じで、教範では模範文までもが付いている。だから、中等教育と軍人教育の差がなかったというのは言い過ぎかもしれないが、日清戦争関連のテキストを両方の教科書に同時に採用しているのは、日本とロシアの武力衝突が現実味を増している時代状況の反映に他ならない。

そして『軍人教育作文教程 卷三』にも、当然ながら、日清戦争関連のテキストが載っている。

- | | |
|------|----------------|
| 第一課 | 思想ノ整頓材料ノ蒐集選択排列 |
| 第二課 | 文章ニ欠クベカラザルモノ三ツ |
| 第三課 | 文ノ種類及変化 |
| 第四課 | 比喩及擬人法 |
| 第五課 | 層語法及漸進法 |
| 第六課 | 解釈文 |
| 第七課 | 議論文 |
| 第八課 | 悲哀ノ情ヲ表ハス文 |
| 第九課 | 崇敬ノ情ヲ表ハス文 |
| 第十課 | 喜悅ノ情ヲ表ハス文 |
| 第十一課 | 公文体 |
| 第十二課 | 翻訳文 |

教科書の前半はレトリックに関するパートで、後半は様々な文のトレーニングを行う実践パートである。その中で、「第八課 悲哀ノ情ヲ表ハス文」は、「凡、悲哀ニ沈メル人ノ耳目ニハ、事々物々、皆、涙ノ種ナラザルナシ。此ノ情発シテ文トナルトキハ、其ノ文ハ、多少、己ガ悲哀ノ情ヲモ満足セシメ、又、人ノ悲哀ノ情ヲモ慰ムル一端トナリ、併セテ、読者ニ同情愛憐ノ情ヲ起サシムルモノナリ。」と説明し

ている。そして、七つの例文が載っているが、3番目が桂太郎「海城招魂祭祭文 原漢文」である。

維時明治二十八年一月十九日、清酌庶羞の奠を以て、西征の役に死せし軍人軍属の霊を祭る。嗚呼軍人軍属。遙に海洋を涉り、堅に当りて撓まず、強に遇ふも卻かず。或は弾丸に死し、或は癘疫に斃る。人。誰か家なからん、児なからん。而も義勇公に奉じて其の私を顧みず。是を以て野に戦ふごとに虜必ず潰離せり。夏の炎天。冬の沍寒。忠節国に尽して其の艱を厭はず。是を以て城を攻むることに之を取ること難からざりき。魂魄天にあれども地に影迹なし。氏名牒にあれども容姿何ぞ見るべけんや。我が武これ揚れるは、まことに此の霊に藉れり。嗚呼哀しいかな。尚はくは饗けよ。 (pp.109-110、傍点省略)

「海城」は交通の要衝であることから、1894年12月、日本軍が占領したものの、その奪還を目指す清国軍が攻撃を繰り返し、翌年2月末まで、激しい戦闘が続いていた。この戦闘をはじめ、日清戦争で犠牲になった兵士を慰霊する儀式は日本全国で行われたはずだから、このような祭文の役割は大きかったに違いない¹⁸⁾。

その一方で、個人レベルでの弔問もしなければならなかったはずだから、その時、役に立つのが、6番目の例文が「六、友人の戦死を聞いて其の父を吊慰す」である。

御令息某君には、此度北清の野に於て名誉なる戦死を遂げさせ給ひしか。君国の御ためには固より此身なき軍人のならひとは申せ、いかばかり御愁傷に渡らせられ候はん。御出師其の日よりあはれめざましき御功労ありて胸に名誉の勲章を輝かし、肥馬に鞭を揚げて御凱旋なされ給へかしと陰ながら祈願致し居りし私にはわが半身を失はれたる心地致され候。さりながら、必定一方

18) 戦死者を弔う儀式に関しては、芳賀祥二(2000)「戦病死者の葬送と招魂-日清戦争を例として-」『名古屋大学文学部研究論集.史学』巻46、名古屋大学文学部、pp.83-112; 芳賀祥二(2015)「大量死の時代と社会的対応-1890年代の死者追悼の形と観念-」『日本思想史学』第47号、日本思想史学会編、pp.13-19を参照されたし。

の衝に当らせられての御事に候うて、君の名誉は天地の有らん限り朽つる事なく、君の御霊は靖国神に祭られてとこしなへに御国の鎮めとならせ給ふべく候へば。さる方に御心やらせ給ひて、あまりの御悲歎はあらせられぬ様致され度、私も君の御あとを慕ひ、ますます奮励精勤致し候うて君が御霊を安んじ奉らんと思ひ候へば、強ひて咽ぶ涙をせきとめ、こゝに御吊慰申上げ候。別紙拙文及び郵券参拾銭、貧生が一片の志に候まゝ御霊前に御供へ下され度候。頓首。
(pp.107-109、傍点省略)

「七、同返事」

愚息戦死につき新情こめさせられての御吊詞並に香料おし戴きて霊前に供へ候。豊の上にてこそは遺憾にも候へどもかく己が本務に弊れたる事に候へば、さのみ悲痛の事は候はず。只御褒め下さるほどの名誉の死にも候ふまじと、そのみ心ぐるしく存じ候。詳細、なほ知るに由なく、いづれ知られ次第御報申すべく候。拝腹。

哀悼手簡心得

- 一、 斯ル文ニハ時候の挨拶等述ベザルベシ。タトヘ述フトモ起筆ニ言フベカラズ。末尾カ、二伸書ニスベシ。
- 一、 薄墨ニテ認ムベシ。
- 一、 封筒ノ四方ヲ黒ク縁取ルヲ近年我国ニモ用ヒラル。

「北清」で「めざましき御功劳」を上げ続けていたので、胸に「名誉の勲章」をつけ、「御凱旋」することを「祈願」していたが、戦死したという知らせを聞き、「わが半身」が失われたようなショックを受けざるをえなかった。しかし、その「悲歎」をなんとか乗り越え、「奮励精勤」するつもりであるという覚悟を述べて、弔辞を終わらせている。

4. 脱亜論の台頭

戦争には犠牲が付くものであるが、戦勝の意義について、日本は日清戦争から学習済みである。先の『軍人教育作文教程 巻三』には、戦

勝を祝う二つの祝辞が載っている。一つ目は個人的に「友人の凱戦」を祝う時の文で、もう一つは、公式行事での祝辞である。

第十課 喜悅ノ情ヲ表ハス文

喜悅ノ情ヲ表ハス文ニ祝辞ノ類アリ。是亦、往々必要ナルモノナリ。左ニ二三ノ例ヲ示スベシ。

一、友人の凱旋を祝する詞

親友某々等、謹みて蕪辞を呈し、某君の凱旋を祝す。回想すれば、君の第何聯隊に属し、某將軍に従ひて某役に趣かるゝや、一心公に奉じて身を顧みず。勇戦奮闘、つねに陣頭に立ちて雨飛の弾丸を冒し、濛々たる硝烟をくぐり、毎戦特功を奏せらる。これ他なし。君が国家のために命を惜まず、戦場の花と散るを以て其の職責となされたるに依る。

(中略)

あゝ君は、国民の本分をつくし、軍人たるの職務を全うして、また一の微傷だに無し。これひとり君の幸福たるのみならず、実に国家の慶事といふべし。余等親交を結ぶもの、いかで之を黙することを得んや。欣喜雀躍の余、一言を呈して貴下の凱旋を祝す。
(pp.137-139、傍点省略)

二、祝捷会祝辞 楠本正隆

嗚呼大なるかな、今上天皇陛下の徳沢。嗚呼盛なるかな、四千萬同胞の幸福。吾人何の好縁ありてか、この前古未曾有の盛世に遭遇したる之を内にしては、三千年來我が祖先の夢想する能はざる憲法の恩典に浴し、参政の権を享有し、自治の制に安堵し、之を外にしては、国光を海表に輝かし、武威を隣邦に振ひ、以て堂々たる大国民の規模を世界に恢宏す。吾人何の好縁ありてか此の前古未曾有の盛世に遭遇したる。

惟みるに、家にありては孝、君に対しては忠文教人に著しく、尚武俗を成す。(中略)一たび暴を禁じ乱を戡むる仁義の師を出し、成歙牙山に捷ち、豊島に捷ち、大に平壤に捷ち、大に黄海に捷ち、九連城を取り、鳳凰城を取り。金州を略取し、大連湾を略して、遂に清国の咽喉にして金城湯池の固めありと称し東洋無比の軍港と声言したる旅順口を陥れ、皇師の向ふ所、草として靡

かざるなく、民として伏せざるなく、鉄騎已に北京を指し、軍気已に四百余州を呑む、亦宜ならずや。(中略)

それ、路は九十里にして百里の行之に半し、業は千仞にして、一簣の功之を欠く。克く始ありて克く終りあること鮮し。記憶せよ、今日の戦捷は其の端緒にして、其の終局にあらざること。然らば則ち、今日の盛会を目して第一回の祝捷会と称す、良に以あるなり。(中略)果して此の如くならば、今日祝捷会の目的聊か報いたりといふべし。敢て愚衷を述べて祝辞とす。盖、これ亦、盛世の市民たる義務に外ならざるなり。(東京市会議員総代トシテ)
(pp.139-143)

『帝国文学』が「日清戦争の捷報にともなう国会意識の高揚」に寄与したから、日露戦争が勃発した以上、同じ役割を担わざる得なかったに違いない。芳賀の次の詩は、その役割を忠実に果たしているのではなかろうか。

「祝捷行軍歌」

(一)/捷報来るいざ祝へ/正義をかざす大日本/いづこに向ふ敵あらむ/凱歌に韓の野も震ひ/渤海湾の波躍る//(二)/捷報来る心地よや/東扶桑の青海原/富士の高根袖広く/見ずや義烈の世々の跡/勇武の血もて飾られぬ//(三)/聴け宣戦の大詔勅/威烈の光仰ぎ見よ/建国二千五百年/鍛ひ上げたる日本魂/用ふる時は来りたり//(中略)//(八)/心安かれ清の友/正義の神は矛執りて/汝が国の疆に在り/心安かれ韓の民/仁侠汝を擁護せり//(中略)//(十一)/とくとく進めうち殲せ/蒙古西比利亞蹶破りて/烏拉超えんも時の間ぞ/ペテルスブルグ遠くとも/正義の弾丸は達すべし//(十二)/起て東洋の大民/奮へ義勇の兵士等/天道我に命じたる/名誉の軍こゝに在り/勝利の軍こゝに在り
(pp.40-43)

この戦争は「正義の日本」と「人道」の「益荒男」が「北地の大魔国」の「露国」と「非道のスラヴ人」を相手にして、「十年臥薪還遼の/怨」を晴らすための戦いである。すでに、空には「満州の野」に「金色の鷄」が飛び回っており、「勝利の翼雲」がなびいている。しかし、ここでとどまらず、「蒙古」と「西比利亞」にある敵を倒し、「烏拉」を越えて「ペテルスブルグ」まで進撃すべきであると言い立てている。

5. 終わりに

本稿では、日露戦争初期における東大アカデミズムと『帝国文学』の動きを、『帝国文学』1904年4月号の3篇の戦争詩と、同時期に刊行された教科書を中心に考察した。

まず、坪井九馬三の詩「征露進軍歌」は、『新体詩抄』に収録されている外山正一の「抜刀隊」の「我が官軍」というテーマを継承していた。

次に、坪井、上田万年、芳賀矢一等の東大アカデミズムの中核グループは教科書作りに深く携わっていた。その時、日清戦争の戦利品等を納めてある「振天府」をはじめ、日清戦争関連のテキストが中等と軍人用の教科書に繰り返し採用され、日清戦争勝利のシンボル化していた。

そして、各教科書には、凱旋の祝いと祝勝会、逆に戦死者への弔問と慰霊祭など、公私レベルでの様々な儀式を行うときに必要な祝辞と弔辞のテキストが載せられていた。特に、芳賀矢一の詩「祝捷行軍歌」は、「捷報」ムードを盛り上げるにとどまらず、アジアを越え、ヨーロッパまで進撃すべきであるという脱亜論を強く打ち出していた。

今回、取り上げられなかった土井晩翠の詩と、『帝国文学』の臨時増刊号については、改めて論じることにする。

参考文献

- 井上亮(2017)『天皇の戦争宝庫』筑摩書房、pp.9-10、p.11、p.14、p.18、p.27、p.44、p.45、pp.59-60、p.167.
- 徐載坤(2018)「日中戦争勃発後の日本詩壇研究」『日本語文学』第83輯、日本語学会、pp.331-351.
- _____(2020)「西条八十の戦争詩研究」『日本語文学』第90輯、日本語学会、pp.245-267.
- _____(2022)「日露戦争期の新体詩研究」『日本語文学』第98輯、日本語学会、pp.347-364.
- 芳賀祥二(2000)「戦病死者の葬送と招魂-日清戦争を例として-」『名古屋大学文学部研究論集、史学』巻46、名古屋大学文学部、pp.83-112.
- _____(2015)「大量死の時代と社会的対応-1890年代の死者追悼の形と観念-」『日本思想史学』第47号、日本思想史学会編、pp.13-19.
- 日本近代文学館編(1977)『日本近代文学大辞典 第5巻 新聞・雑誌』講談社、p.276.

近代教科書デジタルアーカイブ

<https://nierlib.nier.go.jp/lib/database/KINDAI/EG20070442/900335863.pdf>

(閲覧日:2023.01.18)

<https://nierlib.nier.go.jp/lib/database/KINDAI/EG00008036/900139490.pdf>

(閲覧日:2023.01.18)

〈Abstract〉

The Russo - Japanese War and *Imperial Literature*

Suh, Jae-Gon

In the present paper, I analyse the academia of the University of Tokyo and the movement of *Imperial Literature* during the early period of the Russo - Japanese War by examining three war poems included in *Imperial Literature*(April, 1904) and the textbooks published during the same period.

First, *The Poem of Russia-Conquering Marching* by Kumezō Tsuboi inherits the theme of ‘Our Government Army’ underlying *A band of Swordsmen* by Masakazu Toyama, included in *Shintaishishō*.

Second, the core members of the academia of the University of Tokyo, such as Tsuboi, Kazutoshi Ueda, and Yaichi Haga, were actively involved in the creation of textbooks for ‘junior high schools’ and ‘servicemen’, but the textbooks relating to the First Sino - Japanese War such as ‘*SINTENHU* (振天府)’ were repeatedly used for junior high school students and servicemen, acting as the symbol of the victory of the war.

Each textbook encompasses texts for congratulatory addresses and for condolences necessary for various rituals. Further, *The Poem of Victory-Celebration Marching* by Haga enlivened the atmosphere of ‘the news of victory’ and even hammered out the ‘Asia-decentralised statement’.

Key words : Russo-Japanese War, *Imperial Literature*, Kumezō Tsuboi, Kazutoshi Ueda, Yaichi Haga

투 고 일 : 2023년 04월 15일

심 사 일 : 2023년 04월 18일

게재확정일 : 2023년 05월 02일